

太秦・嵯峨野地域の遺跡 6

—都の時代—

(財)京都市埋蔵文化財研究所 東 洋一

はじめに

図 1 は今日までの広隆寺旧境内およびその周辺調査地区を示す。御室川による洪積台地もしくは河岸段丘上に位置する広隆寺旧境内・常盤仲ノ町遺跡では今日までの調査で正方位に並ぶ飛鳥時代の竪穴住居等を多く検出している。1977 年には広隆寺旧境内南西部に位置した弁天池中島より 12 世紀半ばと考えられる経塚を 16 基検出している。また、常盤仲ノ町遺跡からは中世から近世にかけての 60 基以上の土坑墓を 1976 年以降検出した。その後、2010 年に遺跡東端で室町時代後半と考えられる石組火葬場と火葬墓を検出した。

広隆寺旧境内にあった南常盤

図 4 は明治 16～18 年頃、京都府作成の「縮尺貳千四百分一」と明記された『山城国葛野郡太秦村広隆寺境内外区実測図』（京都府立総合資料館蔵）で、広隆寺の地籍図に該当する。この図は当時の広隆寺境内の「藪・林・畑・墓地・宅地」等を詳細に色分けして図示しており、旧境内の大半が藪・林・畑・墓地によって占められていた事が判明する。これらの土地は明治四年（1871）発令の神仏分離令に始まる廃仏毀釈の際、上地令により国家に没収された。この図の東西方向の道が現在の嵯峨街道で、東端に描かれた南北方向の道が城北街道と通称される道である（図 2）。

また、南端部には城北街道西側に沿って約 130 m 程の水路が描かれており、調査でも検出したことから、広隆寺旧境内の東端であることが判明する。

図 5 は図 4 に先立つ明治四年に作成された『広隆寺境内図』（京都府立総合資料館蔵）である。それによれば広隆寺境内に別院・坊の区画が書き込まれ、広隆寺境内に現在は廃絶した別院や坊が十院三坊も存在していたことが判明する。この図の北東部の東端には「寺内堀」と書かれた南北道の北半西側に正方形に区画された広大な「藪」が描かれており、更にこの「藪」の区画内南西角に南北方向に長い「東陽院」と書かれた小区画が描かれている。また、この区画の北に小さな正方形の「墓」区画が描かれている。「東陽院」は、鎌倉時代初頭に作成された『末寺別院記』（広隆寺蔵）に「東陽院 當寺北東角在之 今者無之 東陽大師天平寶字二年七月被建立之」と記録されており図と場所的に一致する（図 6）。

また、図 5 にある広隆寺北限について「下立売通見當街道広隆寺境内ヨリ街道車輪形半分堺南側南常盤ト唱ヘテ広隆寺門前ニ属ス」と但し書きがあり、この図では直線に描かれているが、図 4 では広隆寺北西部が曲線の「車輪形」になっている。この部分が直線で描かれた図 5 では広隆寺北限を経て、広隆寺北西隅で二股に分かれる道が描かれており、「下立売通見當街道」の西延長となる道には「北嵯峨道」、南西に向かう道には「下嵯峨道」と書かれている。この「北嵯峨道」が広沢池を経て嵯峨院（大覚寺）に通ずる「千代の古道」である。嵯峨街道を直線で描いた図 5 と実測図である図 4 を比較して「半分堺南側南常盤ト唱ヘテ」と書かれたように広隆寺境内の北半が「南常盤」と呼称されていたことが判明する。また、図 5 で描かれた別院・坊等のほとんどが、図 4 に描かれた藪・墓地・畑等になっていた区画と一致し、現在の小字名である「東蜂岡町」「蜂岡町」「西蜂岡町」と重複していることから、「南常盤」が「蜂岡町」へと変更された事も判明する。本来「蜂岡」という字・小字名は明治時代以前に存在しな

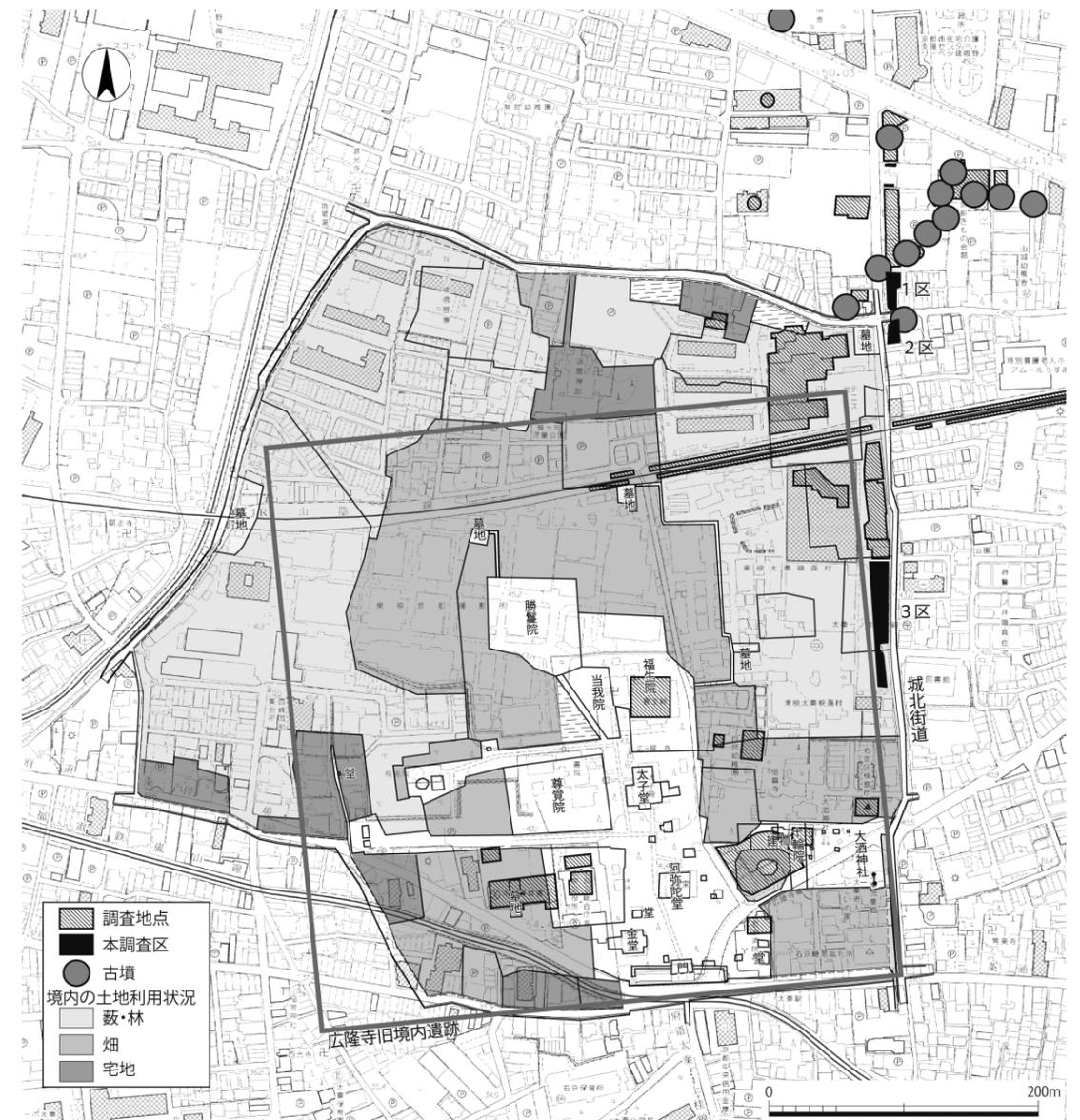


図 1 広隆寺境内内外区別実測図および周辺調査位置図

『常盤仲ノ町遺跡・常盤東ノ町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-15

かった。したがって「蜂岡町」は廃仏毀釈によって上地された土地が行政区分上から、明治時代に新たに付けられた名称なのである。

秦氏の墓域としての常盤

太秦広隆寺北に接する常盤地区は平安京西方に隣接する郊外として、平安時代から永遠を示す歌枕の「常盤里・常盤杜・常盤山・常盤の森」として多くの歌に詠まれているが、常盤の地名は平安時代前期に嵯峨天皇皇子源常の別業が営まれた事に因んだとされている（『京都市の地名』平凡社、1979 年等）。しかし、ここで注目したいのは後に述べるように広隆寺寺伝に境内北半を「常葉林」と明記する記事が多く見られること。そして広隆寺北東に「蜂岡寺」創建期と重なる 7 世紀前半に築かれた径 20 m 級の大型円墳を含む常盤東ノ町古墳群等が存在する点についてである。

8世紀初頭、律令国家を目指し薄葬を推進した元明太上天皇が養老五年八月（721）、自ら詔を發し「朕崩ずるの後、大和国添上郡藏宝雍良岑に竈を作り火葬し、他処に改むるなかれ」とし「乃ち丘体鑿る事なく、山に就いて竈を作り棘を莠り場を開き即ち喪処とせよ、又其地は皆常葉の樹を植ふ即ち刻字之碑を建てよ」（『続日本紀』）とし、墓所と火葬と聖樹・靈樹である常葉樹の関連を述べている。そこで「常葉」と書くのはそれが永遠の生命を保つ常緑樹のことを指し、古来より神仏の依り代である聖樹を意味したからである。したがって、源常の名から常盤という地名が発生したのではなく、既に常葉樹が茂っていた奥津城（常世国）であったからこそ常盤という地名が発生した可能性が高いのではなからうか。南部に展開する太秦が水田耕作に適した土地であるのに対し、高台に位置する常盤は高燥で耕作地としては不適當で、古墳の造営が盛んであった。この地域が開発されるのは御室川流域の一部を除いて御室仁和寺の子院が立ち並ぶ平安時代中期以降のことである（図3）。

また、末法思想が盛んになった平安時代末から鎌倉時代にかけての院政期において常盤地区は八条女院を始め貴族の別業を逆修のための御堂もしくは墓所として造営することが盛んであった。源義経の母常盤御前は常盤の邸宅を御堂にしたとされ、常盤御前墓と称するものが現存する。その跡地には京都六地藏巡りの一つである源光寺「乙子地藏」が存在する。

近世は常盤村が仁和寺領であったのに対し、太秦村は広隆寺領であったとされている（『京都市の地名』）。しかし、寛平二年（890）作成の『広隆寺資財交替実録帳』によれば太秦と常盤に「合陸拾肆町壹段貳佰柒拾捌歩」もの「水陸田」を所領していた。また、延喜十七年（917）藤原兼輔撰の『聖徳太子伝暦』に秦河勝が「賜寺前水田三十町、寺後山野六十町。又賜新羅王所献佛像幡蓋等物」とあり、鎌倉時代初頭の承久元年（1219）成立の『続古事談』でも「寺ノ前ニ水田三十町ウシロノ山野六十町」であったとしているのもあながち誇張ばかりではない。もしそうだとすれば、常盤地区の飛鳥時代の古墳群は全てカバーされることとなる。

この「常葉林」に関して、大谷大学所蔵の『広隆寺別当補任次第』第廿二大別当光圓阿闍梨永承五年（1050）の伝に「切常葉林之木、渡私坊沓脱間、夢中見踏佛像、取即時、作卒都婆立路次了」とし、靈樹が茂る「常葉林」と供養塔である「卒都婆」造立との関連を窺わせる記事がある。先述の『末寺別院記』に「寮病院 又云悲田院 常葉林中建立之 今者無之 別當増命建立也 延喜二年十二月供養之」とあり、また「蓮花院 常葉林在之 今者無之」と記しているのは葬送儀礼に深く関連することからも注目されよう。これらの別院が広隆寺の「ウシロノ山野六十町」に該当する可能性が高いからである。

この点に関して戦国時代の永正元年（1504）八月三日に「明応九年うつし」とする『うずまさくわうりう寺ほうない日記』があり、「七ほうしやうないの事」として太秦広隆寺七保庄内の様子が窺われる記録がある。その写しに続けて「せたのつし衆・一川衆・新しい家衆・西大門衆・トキワ衆・中里衆・あんにやう寺衆」が書き挙げられ、「トキワ衆」が太秦広隆寺七保庄を構成していた事が判明する。

また、天文十五（1546）年十一月の『城州常盤太秦七里地下人等申文』等が存在しており、常盤と太秦は地縁共同体村落である「惣」として、領主広隆寺と強い関係があったことが窺える。時代は降るが江戸時代前期の延宝三年（1675）黒川道祐の『太秦村行記』に「太秦ノ内七里アリ、二王門、新在家、勢多カ辻、中里、市川、安養寺、南常盤」とあり、「西大門」が「二王門」に「トキワ」が「南常盤」に変化しているだけで、他に変動はない。それに続けて「北常盤ハ仁門ノ下ナリ」とあり、既に「北常盤」が仁和寺の支配を受けていた事がわかる。

弥勒菩薩安置に相応しい広隆寺旧境内

さて、平安時代以前の本尊は飛鳥時代に渡来した新羅仏である弥勒菩薩像の可能性が高い。この宝冠弥勒菩薩半思惟像は『日本書紀』にある推古十一年（603）に聖徳太子から秦河勝に下賜された仏像か、

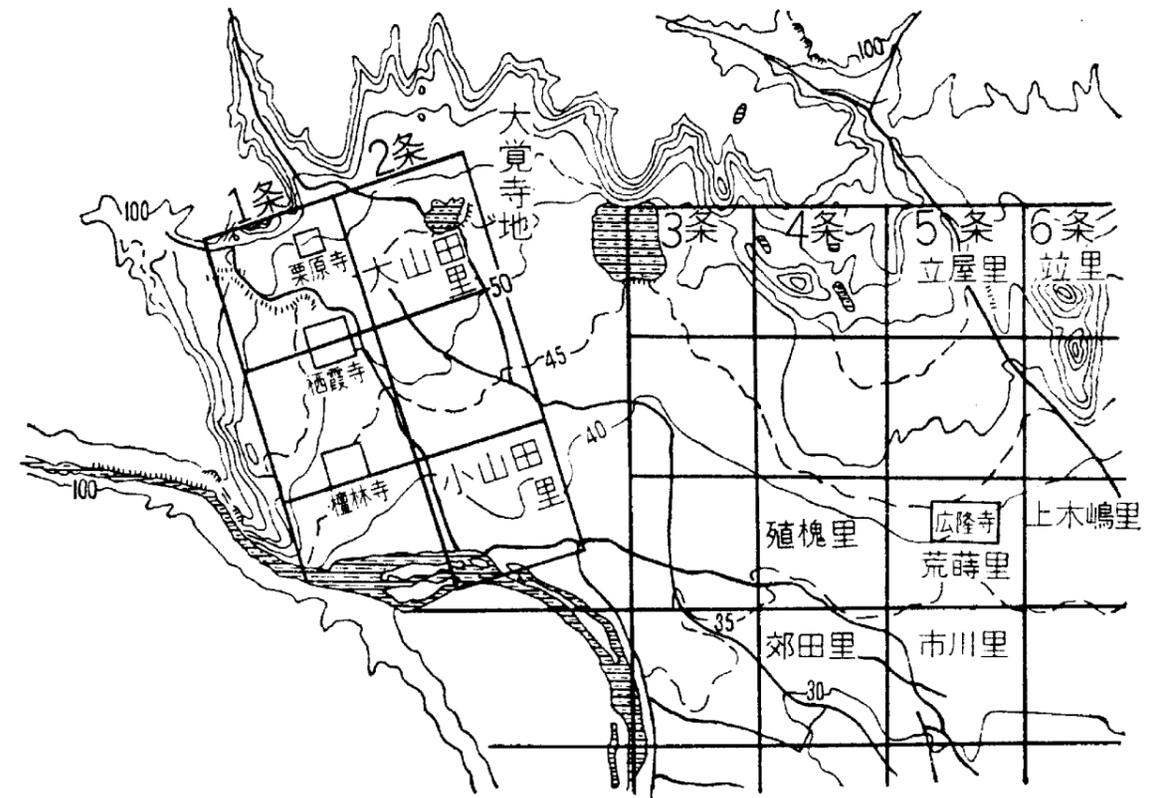


図2 嵯峨野の条里界線 『北白川と嵯峨野』藤岡謙二郎・西村睦夫共著 1968年より転載

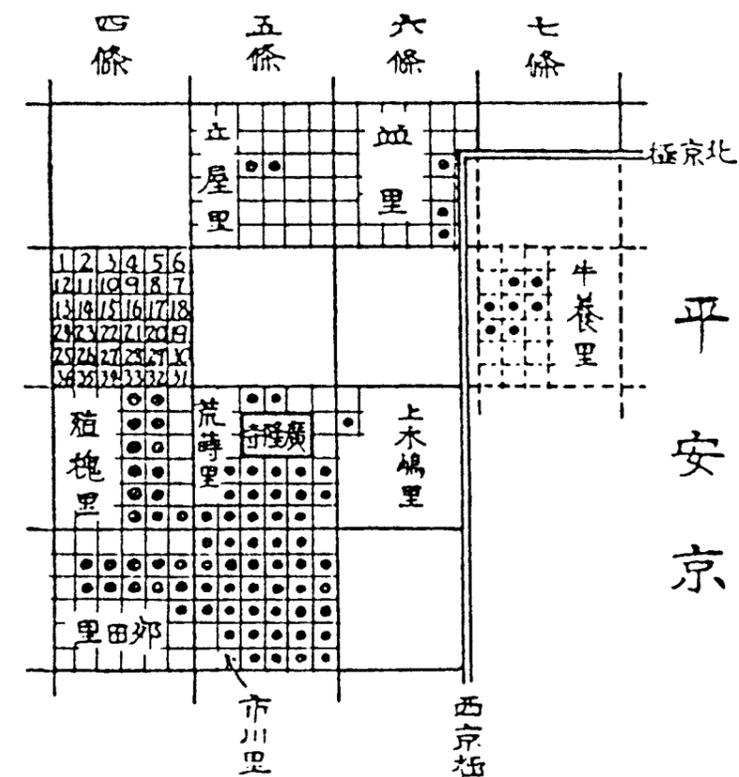


図3 広隆寺付近条里図 『山城国葛野郡の条里について』福山敏男 1983年より転載

この図は許可が出ないためネット上では公開できませんので、ご了承下さい。

図4 『山城国葛野郡太秦村広隆寺境内外区実測図』 京都府府立総合資料館蔵

この図は許可が出ないためネット上では公開できませんので、ご了承下さい。

図5 『広隆寺境内図』京都府府立総合資料館蔵

推古三十年（622）聖徳太子の供養のために新羅国から贈られた仏像を指す可能性が高いとされている。弥勒菩薩は菩提樹下で悟りを開いた釈迦の生まれ変わりとして釈迦滅後 56 億 7 千万年後に兜率天内院四十九院より竜華樹に下り悟りを開き、三度の説法をするとされている。弥勒菩薩が安置される場所として後背地に「竜華樹」に見立てた「常葉林」が存在したからこそ、「竜華樹」下で瞑想する弥勒菩薩像を安置するに相応しい聖地となり得たのではなかろうか。古代の寺院は神の降臨する聖地である林や森に建立されることが多いからである。

しかし、広隆寺が全焼した弘仁九年（818）から、本尊は現世利益の靈験薬師如来とされている。この薬師如来は平安京住民の貴賤を問わぬ信仰を受けていた。久安六年（1150）の全焼後も本尊は薬師であったが、現広隆寺講堂の本尊は平安時代初期の阿弥陀如来で、阿弥陀・薬師・神祇信仰とも習合していた。ところが平安時代後期（1052 年以降）の末法思想の影響から、西国極楽浄土往生の阿弥陀信仰や聖徳太子信仰の高まりと並行して弥勒菩薩が住むとされる兜卒天に生まれ変わり、遠い未来に弥勒菩薩と共に再び現世に戻るこ、即ち、弥勒菩薩信仰の場として再生し、太子ゆかりの弥勒菩薩像を広隆寺の中尊として押し上げた。『続古事談』に「コノ寺ノ本佛ハ百済国ノ弥勒也、光ヲ放給フ佛也、薬師佛ハ客佛也」（本来は新羅仏）とわざわざ述べているのは、末法時代に入った広隆寺の信仰内容の変化と動揺を示すものであろう。また、平安時代に於ける釈迦信仰との関連で述べれば、嵯峨清涼寺に東大寺僧奄然が宋より持ち帰った本尊釈迦如来像の胎内より発見された天禄三年（972）二月三日の『義蔵・奄然結縁手印状』に「是故点定愛宕山、同心合力建立一处之伽藍、興隆釈迦之遺法、然後第二生必共生兜率天内院見仏聞法、第三生共随弥勒下生閻浮聞法得益」とあり、過去仏の釈迦崇拜は未来仏の弥勒信仰であることを物語っている。

弥勒浄土の広隆寺旧境内南東弁天島経塚と火葬場・墓地

図 4・5 に描かれているように、広隆寺旧境内南西に直径 12 m、高さ 1.5 m の弁天島と称される池の中島に弁天島経塚が存在した。経塚とは弥勒菩薩が仏滅より末法の世を経た 56 億 7 千万年後に地上に信者とともに兜率天より下生し、弥勒菩薩の三度の説法（三会値遇）をするときまで写経した経典を残すため、強固な容器に入れて保存するための石組み等で囲いその上に土を盛った塚のことである。埋経は末法を目前に控えた寛弘四年（1007）の藤原道長による金峯山埋経が初現である。道長以降、末法に入ると信じられていた 1052 年以降から鎌倉時代にかけて主に貴族層でブームとなった。弁天島経塚は既にかんりの盗掘を受けていたが、1977 年の調査で平安時代後期の石組みで囲った 16 基の経塚跡が検出された。極楽浄土が遙か西方の永遠のあの世であるのに対し、何時の日かこの世に兜率天から下生し再生する予定地として選ばれたのが弥勒浄土となる経塚が築かれた場所ということになる。弥勒信仰の聖地として吉野金峯山・高野山・熊野等が有名で、幽谷・靈山に多く平野に営まれる例は少ないとされている。しかし、由緒ある弥勒菩薩が祀られている広隆寺こそ弥勒再生の場所に相応しいであろう。しかも、全国的に分布する経塚の後方には信者の墓域・納骨堂が営まれる場合が多い。広隆寺旧境内の弁天島経塚の北から中世の火葬場や墓が検出された。弥勒信者にとっては再生する場所が問題となり、弥勒浄土の聖地に墓地が形成されるからである。ともあれ阿弥陀浄土と弥勒浄土のどちらを取るかという教義上の問題は、金峯山経塚に埋納された藤原道長の願文（図 17）にあるように一旦は阿弥陀仏の極楽浄土に往生し、そこで弥勒仏の出世を待ち、来世はこの地に弥勒と共に再生すると安穩に考えられたようである。結局、院政期の最高の知識人であった大江匡房でさえ「上は兜率に征き、西は弥陀に遭う」「横は弥陀にあい、豎は兜率に往く」「ただ願うのは安養の上生、ひとえに期するは兜率の内院」（『江都督言納願文集』）と書いても何ら矛盾を感じていなかったのである。この点からすれば極楽浄土の方向である平安京の西に位置し、弥勒菩薩が安置された弥勒浄土を体現する広隆寺は墓地としても経塚とし

ても最適地であった。文献では広隆寺北での火葬記録に源倫子が天喜元年（1053）六月十一日「広隆寺乾原」（『大鏡、裏書』）で、藤原師道が康和元年（1099）六月二十八日「広隆寺北東」（『本朝世紀』）で火葬された事を伝える。

平安時代以降、広隆寺は諸宗兼学寺院として、主に真言宗の別当が補任されてきたが、別当制度が有名無実化する中で衰微していった。また、11 世紀以降、京の牛祭で有名な新羅の摩多羅神を祭る天台系の念仏三昧堂である「常行三昧堂」も境内に創設されていた。しかし、火葬を伴う葬送活動や太子信仰・仏舎利信仰・弥勒信仰等によって、教線を庶民にまで拡大した西大寺律宗真言僧叡尊（彼は兜率天往生したと信じられていた）の弟子である澄禅が、建長三年（1251）広隆寺奥院桂宮院を造営し、広隆寺を復興させた。彼は太子信仰・仏舎利信仰によって阿弥陀信仰も受け入れていた。室町時代の『太秦桂宮院領當知行目録』に「當寺之後常盤林并芝原等」、また「常盤南類嶋一所」とあり、南常盤の多くは桂宮院の所領であった可能性が高い。『仁和寺日次日記』承久元年（1219）八月十一日に「院子御所女房伊賀局、広隆寺屋移徒也」とあり、承久の乱で隠岐に流された後鳥羽院に寵愛された伊賀局のために、西園寺公経が屋敷を造り進上した事が記録に見える。広隆寺に伊賀局が書いたとされる、有名な『東寺御舎利相伝次第』が残っているのも、火葬や墓場に関連し、仏舎利が千粒に増えたとする桂宮院の仏舎利信仰と無関係ではないだろう。そして更にいえば圧倒的な阿弥陀信仰と調和さすためにも、太子信仰を第一に掲げなければならなかった。なぜなら旧仏教を代表する弥勒信仰と論理的に対立する鎌倉新興仏教の親鸞・日蓮にとっても聖徳太子は日本仏教の開祖として崇められたからである。広隆寺は平安時代末より、もっぱら聖徳太子信仰のメッカとして現在まで存続した。広隆寺本殿は「上宮王院太子殿」であり、本尊は保安元年（1120）に作成された「聖徳太子三十三歳像」である。

まとめにかえて・広隆寺移転に対する私見

『日本書紀』推古十一年（603）一月一日条に秦河勝が聖徳太子から賜った仏像を安置するため「蜂岡寺」を建立したとある。この「蜂岡寺」創建については平安時代初頭の承和三年（836）十二月十五日の奥書がある『広隆寺縁起』では葛野郡九条荒見社里・河原里から太秦の現広隆寺境内に対応する葛野郡五条荒蒔里に移転したとするが、広隆寺旧境内遺跡からも飛鳥時代の瓦が出土しており、「蜂岡寺」を北野白梅町の発掘調査で検出した「野寺跡」に比定する説や、複数の寺が平安京遷都に伴って「広隆寺」に統合されたという考え方もあり定説を見ない。しかし、ここで述べたように台地上の岡（河岸段丘）の斜面と上端部に広隆寺伽藍と常盤林が存在しており、「岡」に建立された名称である「蜂岡寺」を「野寺」や「秦」と書いた墨書土器が出土した北野・平野に存在する北野廃寺跡に比定するより蓋然性が高いと考える。むしろ「野寺」は『拾芥抄』に「或記云、大内裏秦河勝宅、橋本大夫宅、南殿前庭橘樹、依舊跡殖之（見天曆御記）」とあるように、内裏横に位置する「野寺」を『日本書紀』推古三十一年（623）七月条にある新羅国真平王から聖徳太子の盂蘭盆会（一周忌）に贈られたことを記す「即仏像居於葛野秦寺、以余舎利金塔・灌頂幡等、皆納、于四天王寺」の「葛野秦寺」に充てたい。この寺に安置された仏像が新羅製「宝冠弥勒菩薩像」だと考えるからである。したがって、『広隆寺縁起』にある欠字三文字は『蜂岡寺』である。

廣隆寺縁起

字秦公寺 一名蜂岡寺

謹檢日本書紀云。推古天皇十一年、冬十一月己亥朔、皇太子上官王謂諸大夫曰、我有尊佛像、誰得此像將以恭拜。秦造河勝進曰、臣拜之、便受佛像、因以造蜂岡寺者。謹檢案内。十一年冬、受佛像。小墾田宮御宇、推古天皇即位壬午之歲、奉爲聖德太子、大花上秦造河勝所建立廣隆寺者。但本舊寺家地、九條河原里一坪二坪十坪十一坪十三坪十四坪廿三坪廿四坪廿六坪卅四坪。同條荒見杜里十坪十一坪十四坪十五坪合拾肆町也。而彼地頗狹隘也。仍遷□□五條荒蒔里八坪九坪十坪十五坪十六坪十七坪并六ヶ坪之内。即施入陸地肆拾肆町肆段壹陌玖拾貳步也。又去延曆年中、別當法師秦鳳、竊取流記資財帳等逃亡。又去弘仁九年、逢非常之火災、堂塔步廊縁起雜公文等悉燒亡。然則此等縁起資財帳等共燒亡或散失。雖然或地治開付圖帳、或地常荒未開發、或地入京未入其替。今爲後代、粗注其由留置寺家、以爲累劫龜鏡。

承和三年十二月十五日

檀越大秦宿祢永道

大別當傳灯大法師位壽籠

少別當傳灯大法師位道昌

上一座傳灯満位僧賢

法頭朝原宿祢明吉

都維那傳灯住位僧惠最

寺主傳灯満位僧安惠

図 17

『廣隆寺史の研究』林 南壽著 2003年 中央公論美術出版より転載



飛鳥・白鳳古瓦

①飛鳥寺の創建瓦、崇峻元年（588）に来朝した百済の瓦博士の作、中国南朝の様式を百済様化した優美な蓮花文をあらわす。②は法隆寺、③は四天王寺の創建瓦。花卉の尖端に珠文を配した百済様式の瓦で、同じ范型を使用。④は法隆寺が天智九年（670）に被災した後、再建時に用いられ、初唐様式の豊満な蓮花文を飾る。
①飛鳥寺出土素弁十葉蓮花文鏡瓦（奈良国立文化財研究所保管）、②法隆寺出土素弁八葉蓮花文鏡瓦（奈良・法隆寺蔵）、③四天王寺出土素弁八葉蓮花文鏡瓦（大阪・四天王寺蔵）、④法隆寺出土複弁八葉蓮花文鏡瓦・均正忍冬唐草文字瓦（奈良・法隆寺蔵）（稲垣晋也）

図 16

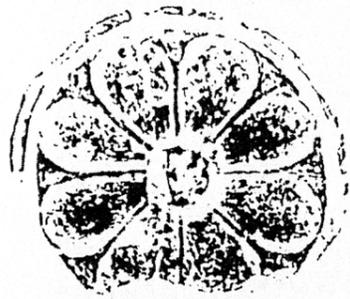
『飛鳥・白鳳仏教史』田村圓澄著 平成6年 吉川弘文館より転載

廣隆寺供養所度眾生之願故本奉
一寺外末寺并別院
療病院 又云此院常奉林十建之
別當増令建之也 延喜三年正月一日供養之
尊學院 推古天皇御願本尊十面觀音 杜宮院西之
蓮花院 常奉林在之
東陽院 當寺東北角在之
亦養寺 云願廣寺 又云優婆塞屋宇
巨衆寺也本者願廣寺云光武天皇改之名
安養寺給云小治田宮御宇秦長倉多乎
郡建之云本者南田西在之燒失後塔院西
建之云或託云安養寺五回板宿月安置
寺身石像於勒如代之寶錄帳者伴堂
菜丸建寺也塔上一院而更安養寺伊來丸
殿在斯堂云

図 6 『末寺別院記』 廣隆寺蔵



北野麩寺址出土素弁十葉蓮華文軒丸瓦



現法隆寺境内地出土素弁八葉蓮華文軒丸瓦

図 15

『法隆寺史の研究』林 南壽著 2003年 中央公論美術出版より転載



図7 経塚群全景（西から）

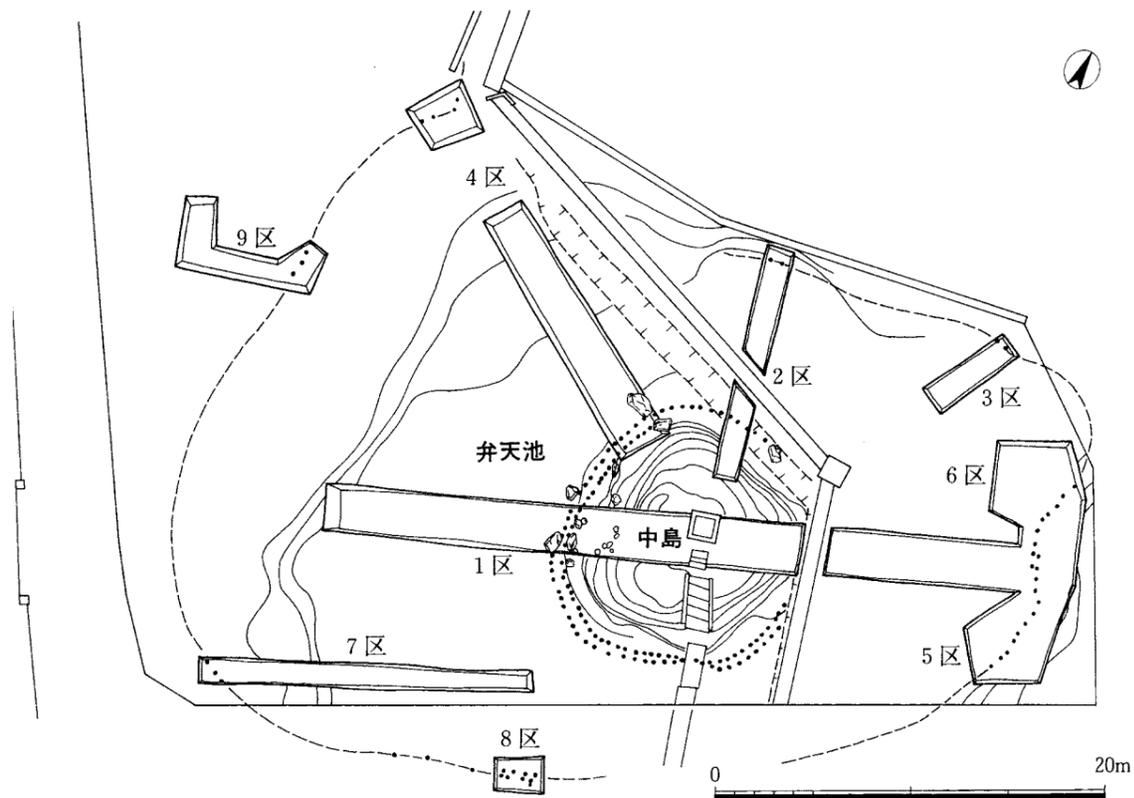


図8 調査区配置図

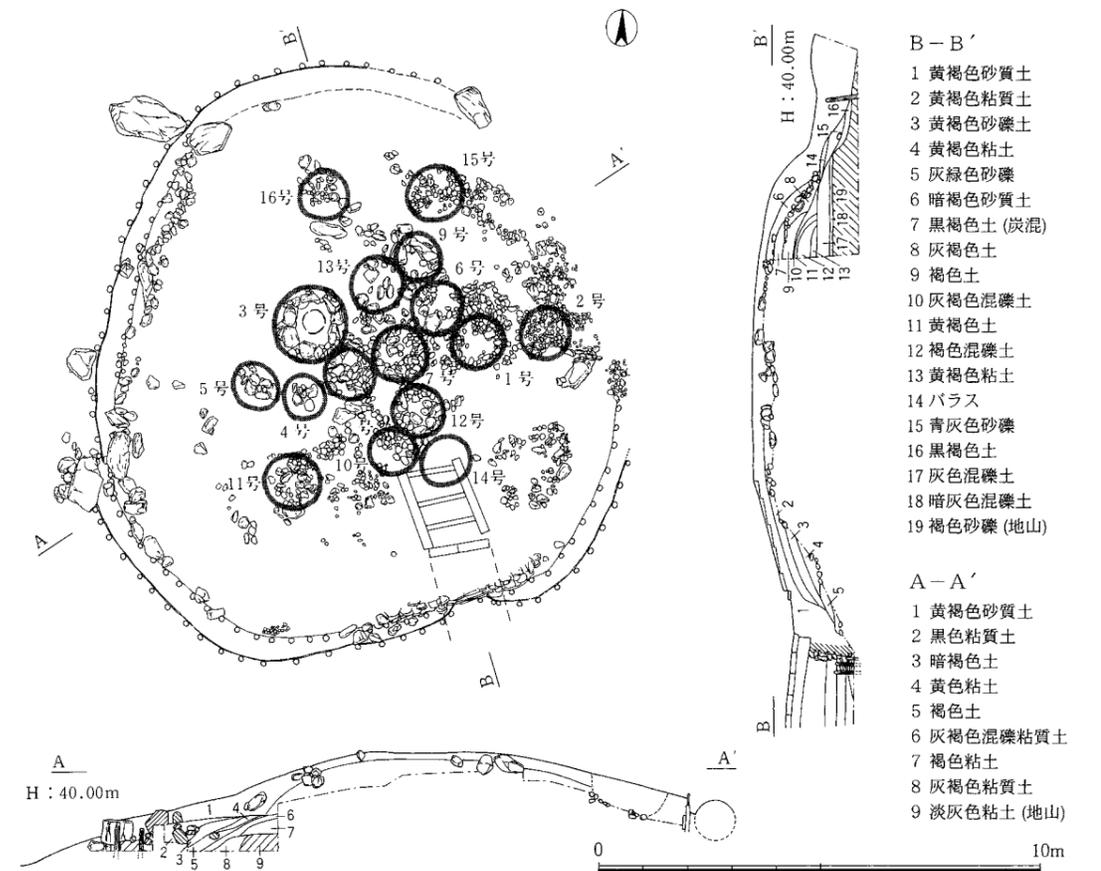


図9 経塚実測図

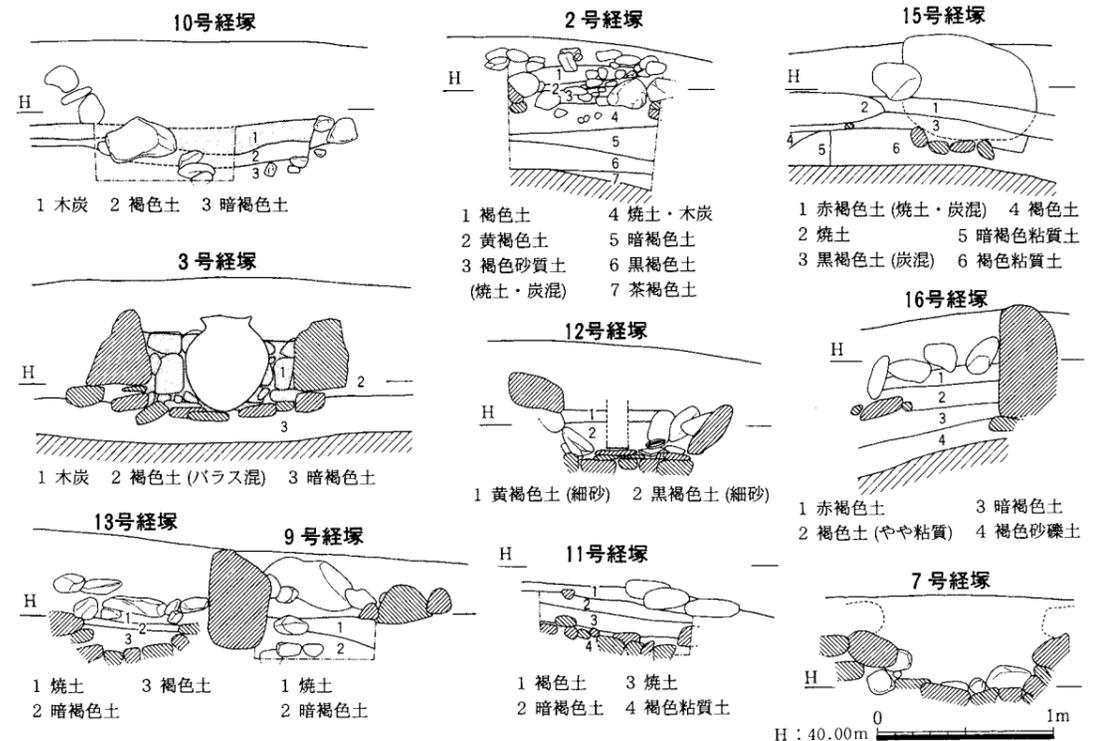
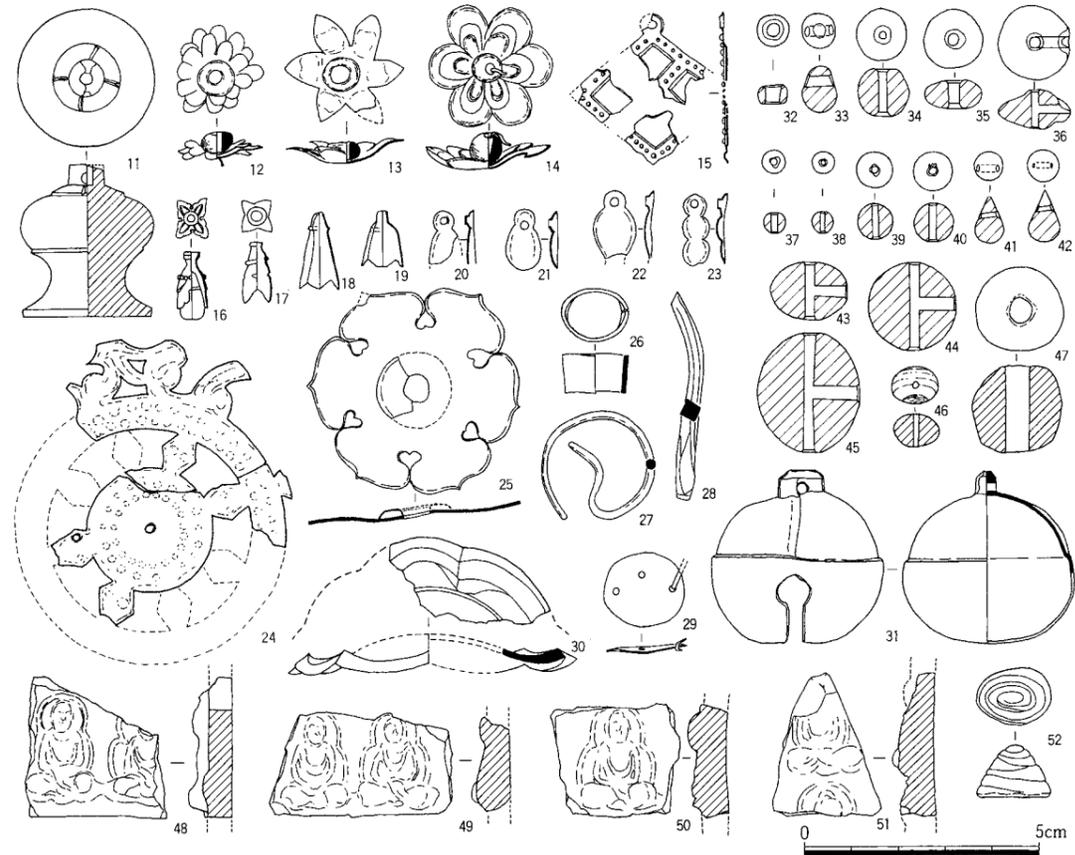


図10 経塚断面図

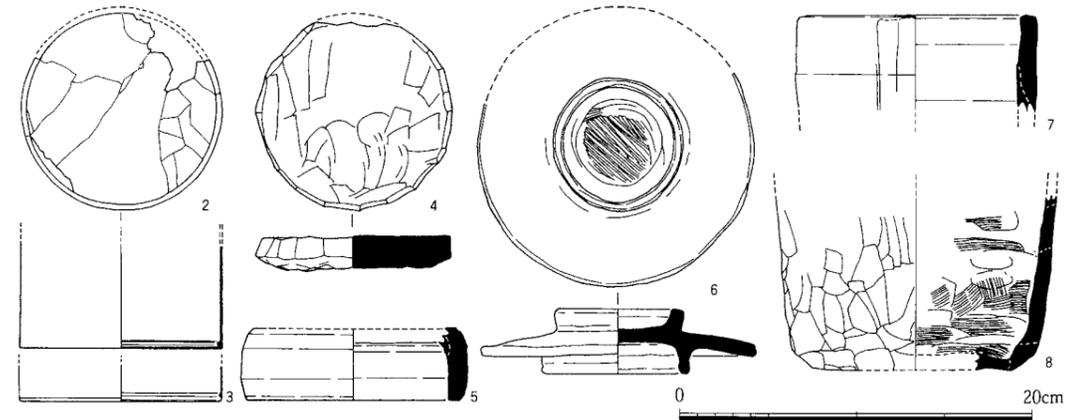


2号経塚(15・19~23・38・39・47) 3号経塚(16・17・32~34・36) 5号経塚(31) 10号経塚(18・35・40・42・43・45・52) 11号経塚(46) 12号経塚(37・41・44) 13号経塚(25~28) 不明(11~14・24・29・48~51)

図11 金属・石・ガラス・木製品実測図



図12 青白磁合子



1号経塚(7) 5号経塚(4) 6号経塚(6) 10号経塚(3) 12号経塚(2・5) 不明(8)

図13 経容器実測図

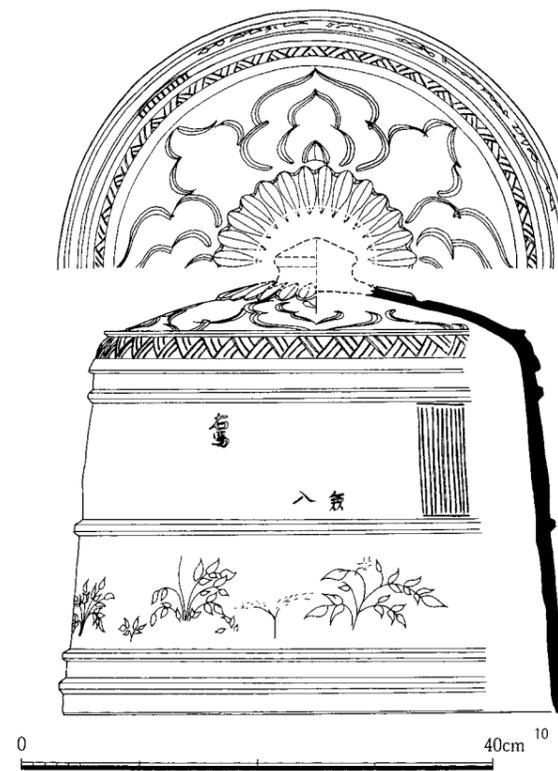


図14 経筒外容器実測図

『法華経』卷七普賢菩薩觀經品に「法華経を受持読誦し、その教義を解する人は、死後、千仏に手を引かれ恐怖せず、悪趣におちず、兜率天上弥勒菩薩の所へ往く。弥勒菩薩は三十二相があり、大菩薩衆がそのまわりを囲み、百千万億の天女と眷属がいるが、その中に生まれることができる。法華経には、このような功德利益があるのだから、一心にみつから法華経を写し、また人々にも書写を勧め、受持読誦して、経の説くごとく修行すべきである。」とあるからである。後に天台宗を中心に弥勒童子三値遇を求める写経・経塚敷く象の論理的根拠となった。また、浄土真宗を開いた親鸞は『大日本國粟散王聖徳太子奉賛』で「和国の教主聖徳皇 広大恩徳謝しがたし 一心に帰命してたてまつり奉賛不退ならしめよ・・・仏智不思議の誓願を 聖徳皇のめぐみにて 正定聚に帰依して 補処の弥勒のごとくなり」とする阿弥陀・弥勒・聖徳太子等同の和讃を作成している。

資料



紺紙金字弥勒上生經
(寛弘四年 道長書写)

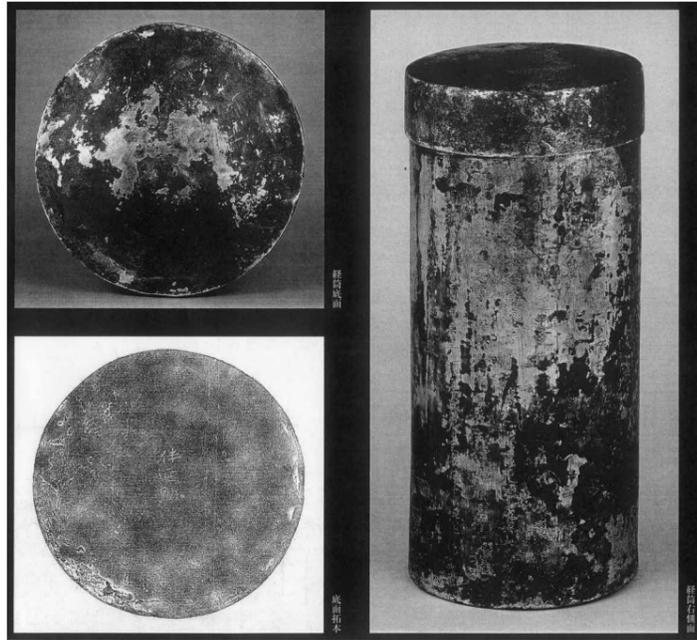


図18 金峯山出土 藤原道長經筒・道長書写(上)と願文(下)

南瞻部洲大日本國左大臣正二位藤原朝臣道長、百日潔齋、率信心道俗若干人、以寛弘四年秋八月、上金峯山、以手自奉書寫妙法蓮華經一部八卷、无量義經、觀普賢經各一卷、阿彌陀經一卷、弥勒經上生下生成佛經各一卷、般若心經一卷合十五卷、納之銅篋、埋于金峯、其上立金銅燈樓、奉常燈、始自今日期龍華之晨、於是弟子焚香、合掌白藏王而言、法華經者、是為奉報釋尊恩、為值遇弥勒、親近藏王、為弟子无上菩提、先年奉書欲齋參之間、依世間病惱、事与願違、為恐浮生之不定、且於京洛供養先了、今猶所以埋於茲者、蓋償初心、復始願之志也、阿彌陀經者、此度奉書、是為臨終時、身心不散乱、念弥陀尊、往生極樂世界也、弥勒經者、又此度奉書、是為除九十億劫生死之罪、證无生忍、遇慈尊之出世也、仰願、當慈尊成佛之時、自極樂界、往詣佛所、為法華會聽聞、受成佛記其庭、此所奉埋之經卷、自然涌出、令會衆成隨喜矣、弟子得宿命通、知今日事、如智者之記靈山於前會、文殊之識往劫於須臾者歟、嗚呼發菩提心、懺無量罪、運東閣之匪石、加南山之不騫、埋法身之舍利、仰釋尊之哀愍、藏信心之手跡、憑龍神之守護、願根已固、我望已足、抑憩一樹之蔭、飲一水之流、猶不是小緣、况此之道俗若干人、或有以香花手足、與此善者、或有以翰墨工藝從此事者、南無教主釋迦藏王權現知見證明、願与神力圓滿弟子願、法界衆生依此津梁、皆結見佛聞法之緣、弟子道長敬白、

寛弘四年 丁未八月十一日

『金峯山埋經一千年記念特別展覧會 藤原道長 極めた栄華・願った浄土』京都国立博物館 2007年より転載

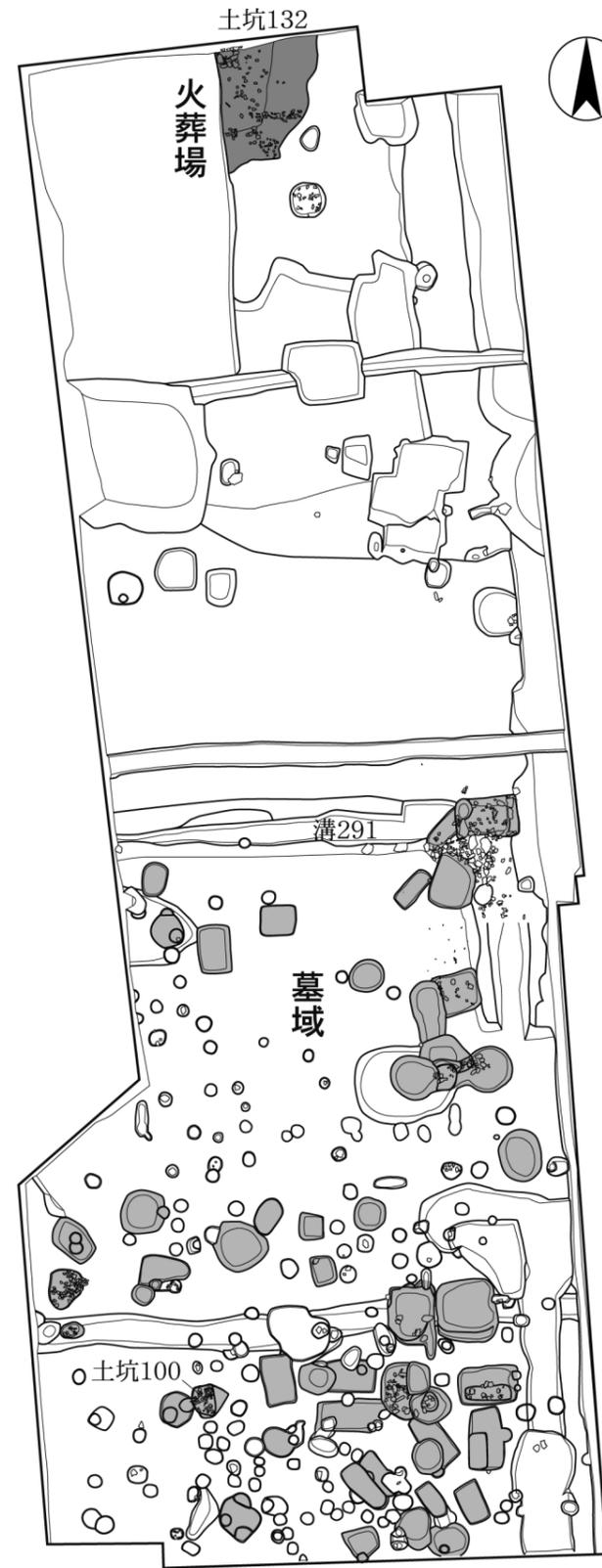


図20 遺構概略図(1:200)

『常盤仲之町遺跡』
京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-16

資料

阿彌陀	無量壽	北魏(四九五)	唐(高宗(七〇四年))	計
〇	〇	八	〇	八
三	一	〇	一	二
五	一	〇	〇	六
四	九	〇	〇	二
三	〇	〇	〇	〇

竜門の造像変遷
(塚本善隆『支那仏教史研究』380頁の表による。)

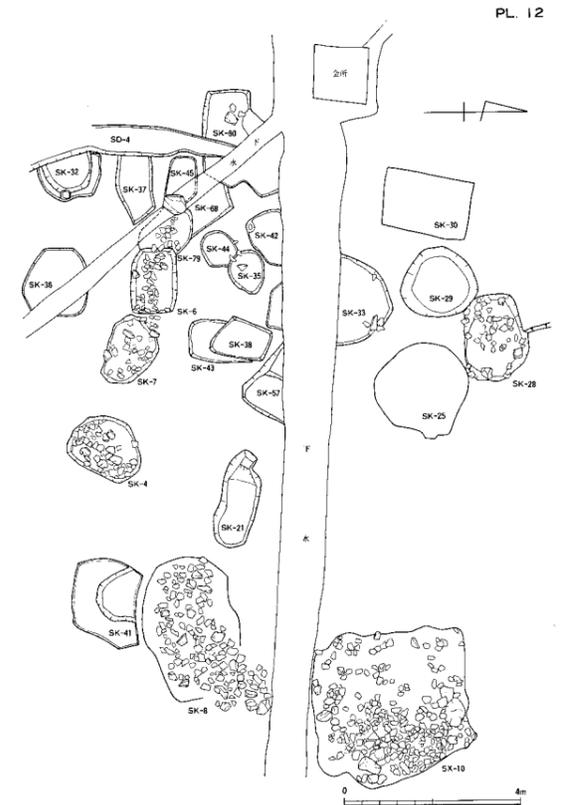


図19 土坑墓群実測図

『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』
京都市埋蔵文化財研究所調査報告 - III 1978年



図 21 第 1 面 土坑 132 (南西から)
『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-16



9 土坑132 ヒト焼骨



12 石組250 ヒト焼骨

図 22 出土した人骨片



図 23 第 1 面 石組 250

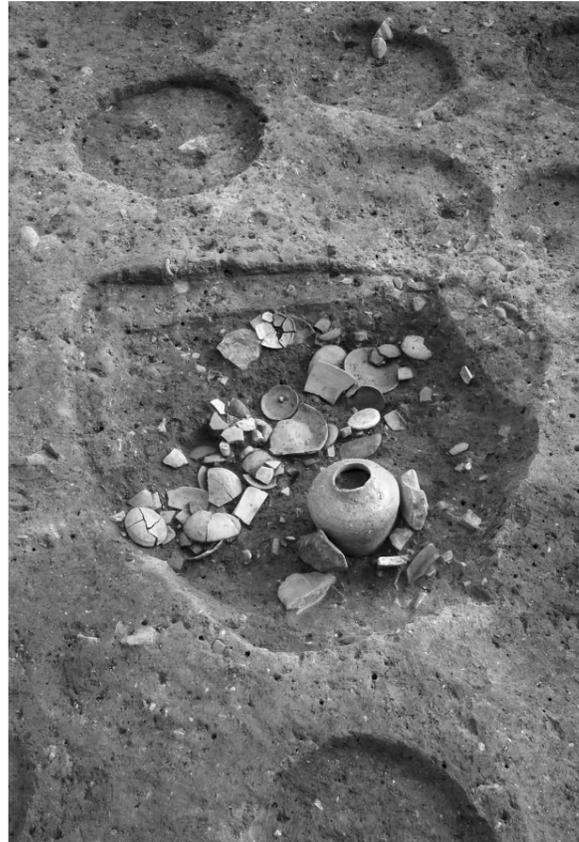


図 24 第 1 面土坑 100・278 (北西から)



図 25 第 1 面 土坑 102 (西から)

『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-16

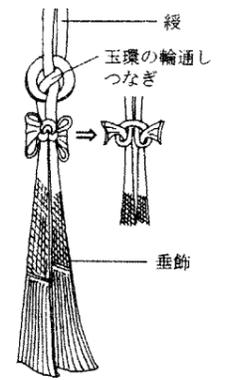
新羅系弥勒菩薩像



新羅系半跏像の腰佩垂飾 (左・広隆寺像、中・国宝83号像、右・北枝里像)

明治の大修理以前の広隆寺像 国宝83号金銅弥勒菩薩像 北枝里出土像

百済系弥勒菩薩像



百済の腰佩垂飾



扶蘇山出土像



観松院像